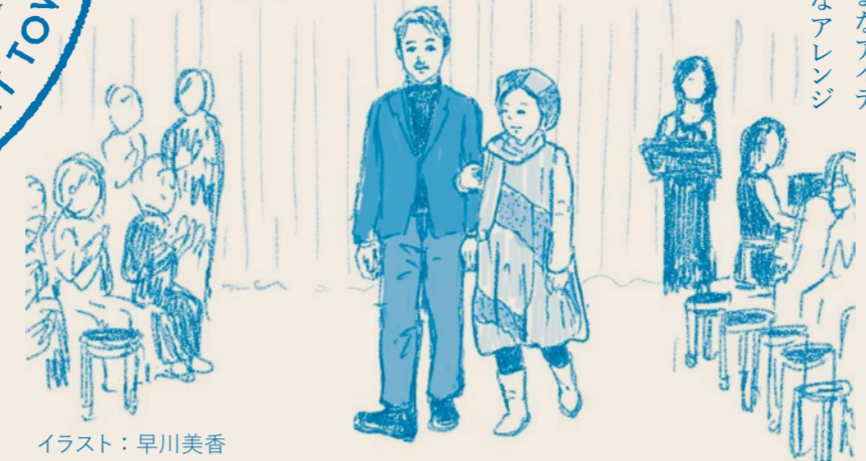


主役はイケメン!? いえ、活き活きばあば!!

港のマーリー／かわら版83号より

はい、どうも小松菜奈です。いいえ、違います。俳優の菅田将暉があまりにもモテる小松菜奈を心配してプロポーズをしたという話が好きです。あわよくばモテすぎてプロポーズされたい。ご無沙汰してます。港の冬もマーリーです。先日、港まちポットラックビルへ今年で4回目となるらしい、まちで何かをつくられている方々の作品を集めた展示「つくるを集めてまちをひらくto」(通称:「つくる展」)の特別企画として実施された、ばあば工房による「着物リメイク」ファッションショーを観てきました! 見どころはやはりそれぞれが製作した着物リメイク作品! 袴をスカートにしたものやボンチョを作られる方、みなさまさまざまなアイデアで大変素敵なアレンジ

クラシック音楽を8GMに 着物リメイク作品でランウェイ



イラスト：早川美香

似てない似顔絵という記事をかわら版に掲載してもらってから1年。似てない似顔絵屋としてみなと土曜市に出店してみたい。お客さんからは「似てないが雰囲気は挿んでいい」「似てしまっている」などの感想をいただきました。中には反応に困ったり、笑ったりする方もいました。似顔絵は顔の各々のパーツが実物と全く一緒でも、配置が微妙に違ったりすると別人に見えたりします。

似てない似顔絵という記事。福笑いを想像してもらえばおわかりになるでしょう。自分の描く似顔絵の違和感は福笑いのメカニズムで解明できるのではないかと考えています。そのメカニズムにより生まれたクリチャーが鑑賞者の様々な反応を生んだのかもしれない。信じるか信じないかはあなた次第。さあ、次はどんな顔になるだろうと、私は描くのが楽しくて仕方ないのです。

最近似顔絵をキーホルダーにして渡してくれます。次は何をやってくれるんでしょう?

似てない似顔絵屋 空洞で須藤／かわら版79号より

先日、港まちの住人Aさんがつくるガリのレシピを教わって、みんなつくる会が開かれました。Aさんがお母さんかお姑さんから聞いたレシピで、スライスした生姜をささみ茹でて水気が無くなるまで絞ったら酢液を入れて完成、というシンプルな作りですが、美味しさに繋がる小さなこだわりがたくさん隠れていました。土や皮がついた部分は丁寧に包丁でこそぐ、生姜は繊維方向に沿ってスライサーで切る、スライスする時は親指の付け根を使うと無駄なく切れる、箸で回しながら軽く茹でるなど、ネットのレシピでは省略されちゃうような小さなこだわりが溢れていました。中でも、茹でたてあつあつのガリを素手で水気が無くなるまで絞る作業はかなり大変。生姜の熱で酢液を溶かすとよく馴染むため、普段はAさんも渋々やっているそう。それでも「あつあつ!!」と叫び、顔と手を真っ赤にしながら絞っていた時はなんだかみんな楽しそう、Aさんが「みんなでやるならいいけど」と咳いてくれたのが嬉しかったです。酢液に入れたものを消毒して瓶に詰めたら完成! 甘酸っぱくて生姜の作用で内側からヒタリた、冬の季節にピッタリなガリができてね。※材料:生姜1kg、酢液(砂糖大5、塩小1、酢400ml) 塩小1、酢400ml

あつあつあつのガリづくり マミヤ／かわら版82号より

何の具がいいのかな、旬の食材がいいよね。これを入れたら絶対迫力があるよねとかで数種類の具材を用意して、あとはキャベツのみのあっさりもいいかなと、おまけで準備しました。作る工程は実に楽しく、出来上がりを想像しながら笑いがこぼれます。思ったより早く可愛いおやきが完成しました。味を確認するのもわくわくで、えっ! キャベツだけのおやきが断トツで美味しかったのにはびっくりでした。シンプルスベストか! そんなことを感じながら、そうだ、次はホール草のバターじゃ油炒めはどうかな、人参のペロソニーとかどうだろう? 絶対、美味しいと思う、などと夢はどんどんふくらんでいます。この企画を育てていただきスタッフの皆さん、有難う御座いました。

本誌前号(21号)で登場いただいた「うどんDINING金半」さんによる記事。まだ前号を読んでいる方は是非!

アートブックフェアで繋がる広がる 早川美香／かわら版80号より

港まちアートブックフェアが今年も開催されました。開催期間が長期に渡り来場者が分散するので、自分のペースで本と向き合え、じっくり時間をかけて作品を堪能することができて、自分にはない感性に今年も大いに刺激を受けました。私は2020年に来場者として訪れて、この空間に自分の作品もあつたらいいなと思い、翌年に和食のイラストをテーマにしたイラストブックで応募しました。審査を通過した連絡が来た時は、尊敬する作家さん達と一緒に緒で描いてもらっています。

ハプニングおやきを体験して アイミー(釜半)／かわら版81号より

ジェフリーキャンベル。家具の脚から着想を得たヒールのデザインが特徴的。トレンド性が高く手が届きやすい値段でおしゃれ学生にも人気。

黄子さんの服を2人で着て...



ファッションから紐解くパーソナリティ クローゼットを開けたなら。

港まちで見つけた味のあるお洒落人のクローゼットを漁りながら、ものの背景や当時の思い出を聞き、今の自分をつくりあげたものが何かを探していきます。



千種貴子さん 専業主婦



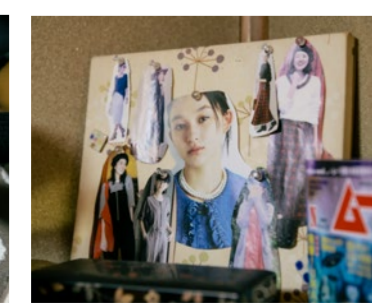
アクセサリボックスを開けるとたくさん思い出が! 幼稚園時代のバッチや母とお揃いしていたレースリボンなども!

ジェフリーキャンベル。家具の脚から着想を得たヒールのデザインが特徴的。トレンド性が高く手が届きやすい値段でおしゃれ学生にも人気。

THAT'S CUTE!



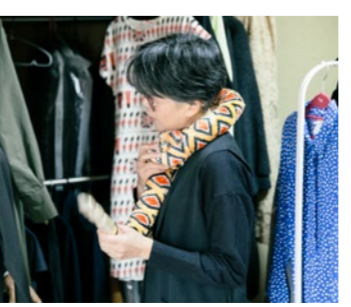
2Dの世界に迷い込んだかと思うくらい平面的な木のカバン。



その時々で気になった雑誌を読んだり好きなスタイリングを切り抜いていたそう。



ラックを見るとわかる、いい意味で一貫性のないトキメキコレクション! 好きです!



気に入って買ったヘビの巻物! けど、「息子のお友達に蛮な目で見られると良くないかも」と家の外では未着用...もったいない!



ポットラック新聞 vol.22
2025年2月14日発行

official Website
minnatomachi.jp

official Facebook
nagoyano.minnatomachi

official Instagram
potluck.paper2017

港まちづくり協議会
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN

Minatomachi
POTLUCK BUILDING

※港まちづくり協議会は、ポートピア名古屋設置に伴い、避難所を施行する自治体(蒲郡市など)から名古屋市に交付される「環境整備協力費」を用いたまちづくり事業を、住民と行政との協働により検討・実施しています。 ※本紙に掲載されている内容の無断転載、転用及び複製などの行為はご遠慮ください。

1 DAY 「柘さん」のあそび日。



子どもとともに習い始めた書道はかれこれ40年。家事の合間を縫って書、絵画、俳句、ガーデニングと休む暇なし。孫からはカナダ土産のハーブティ、娘からはクレヨン、弟からは喉に効く柑橘じばらをもらって、お返しには絵手紙を。



7:00 手作りジャムのモーニング
手作りのジャムをたっぷり塗って食べるのが毎朝の風景。冷凍庫にはちじくとりんごと、じばらのジャム。



9:00 句会準備
句会の朝はいつもよりバタバタ。前回から1ヶ月の間に書き溜めた句から5つ選んで句会に持っていく。



13:30 港まち俳句の会
句会は月1回。句をつくるだけでなく、集まって感想を言い合うことで新たな創作意欲が湧いてくる。今日は遠方から初参加の若者も。



16:00 追憶の散歩
半世紀以上住む街は建物も住む人も変わり、思い出とともにテクテク。臨港病院は子どもたちがお世話になった。



あくる日 西築地小学校トワイライトスクール
小学生たちに俳句を教えています。子どもの素直な感性に刺激をもらっているそう。

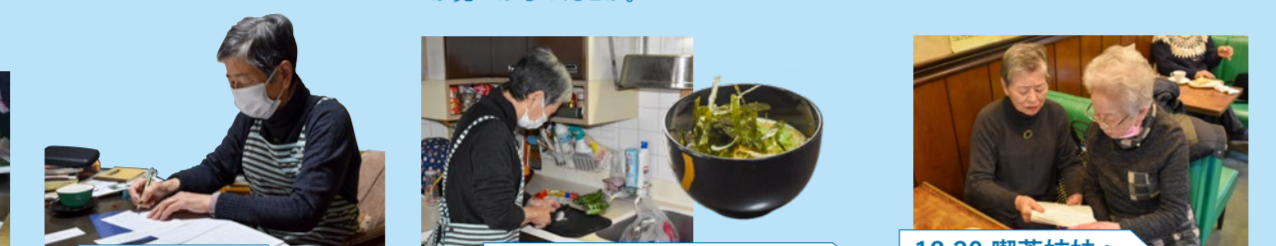
柘さんの日常
24時間生活リズムの円グラフ。就寝、起床、炊事・朝食、家事、自由時間、読書、テレビ等、散歩、夕食、炊事、買い物・庭仕事、読書、テレビ等、自由時間、就寝。

港まちの日常を彩る、誰かの1日に密着してその人の普段の様子や人となりをお伝えする企画第2弾。「港まち俳句の会」の一員にして、多様な趣味を持つ柘町子さんの日常に迫ります。

12月21日 港まち俳句の会の活動日



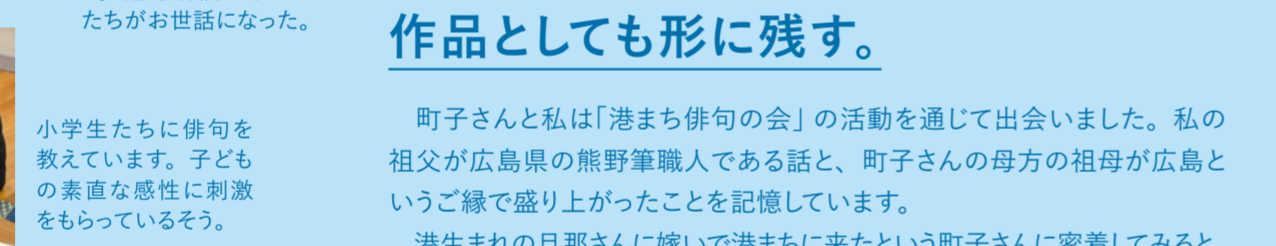
7:30 庭仕事で菊の刈り取り
旦那さんが木の剪定、町子さんがガーデニング担当で小菊の刈り取り。日々の生活に俳句のアイデアが見つかるのだとか。



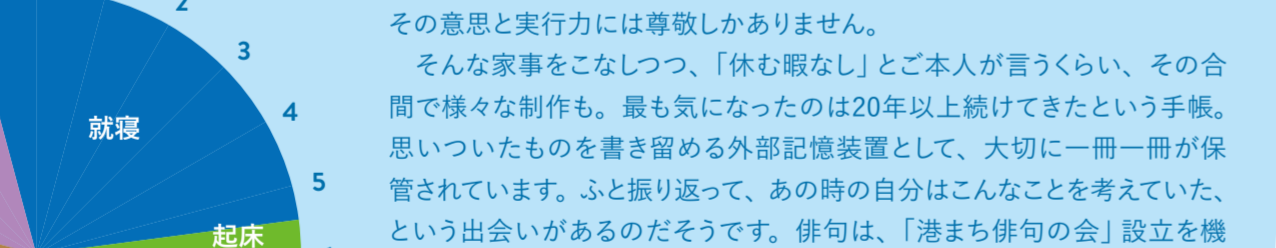
8:00 思いついたらメモ
20年以上続けている手帳。読書記録や料理のレシピ、旅のパフレットの切り抜き・挿絵も入って、思い出の詰まったタイムカプセルみたい。



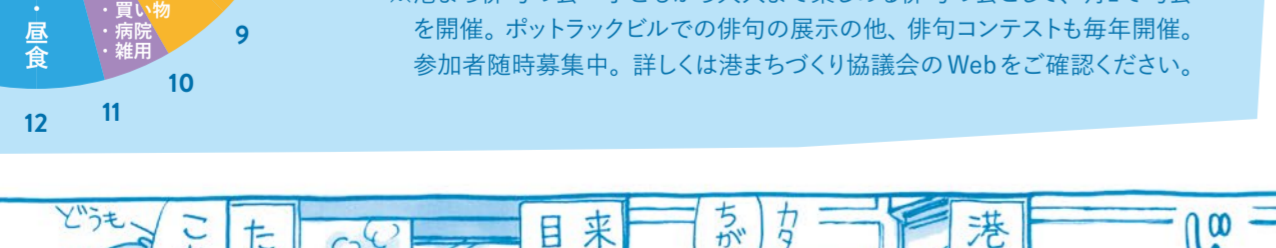
11:30 キッチンが私の仕事場
夕飯の準備も兼ねたマカロニサラダ（酢とオリーブオイルをいれてみたのよ）と、旬の自然薯を使ったそうめん。



12:30 喫茶姉妹へ
句会前に喫茶姉妹へ。同じく俳句の会に所属する店主の裕子さんに句の相談。今月の季節「年用意」の句に悩む町子さん。



19:00 自選句の清書
ポットラックビル内にある「港まち俳句の会」掲示板。毎月ここに飾る短冊の清書は町子さんの大切な仕事。字の力が句に宿ります。



16:30 ダイニングで年賀状書き
キッチンに立つ時間だけでなく、写経、絵手紙、読書と自分の時間も大事にしています。

日々の生活を楽しみ、作品としても形に残す。
町子さんと私は「港まち俳句の会」の活動を通じて出会いました。私の祖父が広島県の熊野筆職人である話と、町子さんの母方の祖母が広島というご縁で盛り上がったことを記憶しています。港生まれの旦那さんに嫁いで港まちに来たという町子さんに密着してみると、「キッチンが私の仕事場なの」と朝からテキパキと夜ご飯の下ごしらえ。「人をもてなすことを大変と思わない」「凝ってる料理の方が好き、いろいろ試してみるの」という町子さんの姿に、家事に誇りを持っている印象を受けました。「お出かけをしてどんなに疲れても、食事だけは絶対に手を抜かない」。その意思と実行力には尊敬しかありません。そんな家事をこなしつつ、「休む暇なし」とご本人が言うくらい、その合間で様々な制作も。最も気になったのは20年以上続けてきたという手帳。思いついたものを書き留める外部記憶装置として、大切に一冊一冊が保管されています。ふと振り返って、あの時の自分はこんなことを考えていた、という出会いがあるのだそうです。俳句は、「港まち俳句の会」設立を機に始めて6年目。まだまだ新しい言葉や用法に出会えることにワクワクしているとも。心豊かに人生を楽しむコツ、そして自分の仕事=家事に真剣に向き合う姿勢を1日を通して学ばせてもらった取材でした。

※港まち俳句の会…子どもから大人まで楽しめる俳句の会として、月1で句会を開催。ポットラックビルでの俳句の展示の他、俳句コンテストも毎年開催。参加者随時募集中。詳しくは港まちづくり協議会のWebをご確認ください。

世代を超えて 活動的な4人の共通点発見!

港まちの憩いの場「喫茶真砂」へ集まったのは20~70代の男女4名。世代は異なるものの、自己紹介をしておやきを包み始めるとすぐに打ち解けて、「やりたいこと」が話題に。60代のヒトシさんは料理教室に加えて和菓子、ホットヨガ、ズンバまで習う多趣味っぷり。しかし活動的になったのは定年退職後からで、若い頃は仕事一筋だったため当時やりたくてもできなかったことを今やっているそう。「とにかく今はアンテナを張っているんなことをやってみよう。20~50代は暗黒だったからね」と苦笑い。そんなヒトシさんの話を目を丸くして聞いていたのはシモンさん。もともと理学療法士として術後の高齢者のリハビリをサポートして、仕事一筋だったがゆえに退職後にやりたいことを見つけれない方を多く見てきたそう。「やっぱり外に出向く癖付けをしないと難しいよね、高齢者問題」と現役で働くサトコさんの鋭いコメントに対して、「まさに」と頷いたのは70代のシロウさん。そういった方を外に出向かせるため、月に一度料理教室を開き、チラシをつくって港まちポットラックビルや図書館、社会福祉協議会、生涯学習センターなどに配っているそう。「SNSもやっているよ。最近はYoutubeのコメントが一番うれしいね」とどこまでも器用なシロウさん一同びっくり。自分のために、誰かのために、いくつになっても全かな皆さんの話を聞くことができました。



試食とまとめ!
一番人気は豚キムチ。みんなが美味しいと言いながら食べていると作ったお母さんもうれしそう! 試食でお腹いっぱいになると話題は、悩める男シモンさんへの人生相談会。先輩方から偏った意見をもらい終始困り眉になっていました。



おやじのわいわい料理同好会が開催している「みんなでわいわい料理教室」に参加してみました。調理するメニューは、ミネストローネ、野菜サラダ、フルーツのバンドケーキ。分けられた班の中で分担しながらレシピを見てつくり、途中で先生から初心者でも上手につくれる調理のコツや、レシピ名の由来などを教わりました。「歯が痛いから細かく切りや」と世代ならではのアレンジを加えたり、「かき混ぜるのは若い子の力ごと任せてもらえたり」と世代を問わず初心者同士で助け合いながら楽しむことができる教室でした!

ハプニング おやき



みんなで持ち寄った おやきの具材
「喫茶真砂」のカレールー…人気メニューに欠かせないルー。お店ではカレーライスか、カレースパで楽しめます。
かぼちゃサラダ、大学芋、切り干し大根…おやき通のサトコさんが合いそうなものをスーパーで購入。
M&M'sのチョコ…シモンさんの持ち寄り。「カラフルな20代にしたい」という意味が込められている。



2 和菓子教室に通うヒトシさんはさすがの器用さ。上に乗せる飾りにもこだわっている様子。
1 サトコさんが迷いなく包んでいく姿に負けじと手を動かし始める皆さん。



3 シロウさんと一緒に「おやじのわいわい料理同好会」を盛り上げるメンバーの一人。60代。
どの味が楽しみか話し合う。シモンさんは真砂のカレールーが楽しみとウキウキ。
4 マーブルチョコの着色料がきれいに色写りして映えてる〜!と一同大盛り上がり。



完成した おやき
「喫茶真砂」の常連。長野県に通うほどのおやき好きだが、つくるのは今回が初めて。50代。



参加したひと
ヒトシさん シロウさん シモンさん サトコさん



港まちに住む人と港まちに来た人でおやきを包みます。具材は当日に各々用意したものを知らずという仕掛け付き。第2回は港まちの喫茶店「喫茶真砂」に世代を超えた4人が集まりました。

港まちに活動するサークルを訪ねます。今回は、にぎやかな料理教室&食事会を開いている港生涯学習センター自主グループへ。

クラブ名	おやじのわいわい料理同好会
結成	2009年1月
活動場所	港生涯学習センター
活動頻度	第1土曜を中心に年9回
現在の部員	会員17名、協賛会員4名
結成のきっかけ	定年退職後、家にこもりがちな高齢者男性のコミュニティの場として結成。
活動コンセプト	近年は女性や留学生も交え、世代を超えた料理作りと一緒に食べることを通じて、コミュニケーションを図る活動を行っています。



マンガ：宇佐江みつこ…名古屋在住の漫画家・イラストレーター。岐阜県美術館のSNSで4コマ漫画『ミュージアムの女』を連載中。

曜市のボランティアに入って、今年の7月からポットラックビルの受付をしています！

「わお！ そうなんだ。土曜日きっかけてまち協で働いているってことですか？ なぜボランティアに？」。つい、質問が矢継ぎ早になってしまふ。

「元レジスタで働いていた方が、専門学校の先輩なんですけど、その方のインスタのストーリー(ショート動画)に『ボランティア募集します』ってのが出て、その人が言うのなら楽しそうだなって思ってたんです」

また、驚かされた。またデザイナーの卵。しかも、すでにボランティアから始めて、スタッフにもなってくれた人がいたとは、なんとも心強い。やるじゃん土曜日！

「そうなんだね。で、どうですか？ 土曜日」

「なんか、楽しい。みんながドッと笑う。戸田さんの話にみんなが感激に引き込まれている空気が伝わってくる。『ボランティアの時も楽しかったですし...。なんか、デザインもできますよって募集に書いてあって、私、副業的にデザインの仕事をやってみたくったんで、このボランティアでその経験ができるなら良いなって思ってた。今は、土曜日マップを作ったりとか...」

「一番楽しんでたね。ポスターもお願ひしてますよね。岡西さんも、戸田さんのことは印象深いようだ。」

「友達とか、私たちの専門学校の子にちょっと声をかけて、ボランティアしませんか？ って言ったら、実際に入ってくれた子もいて、ちょっとなんか自分で声をかける活動も楽しいなって思ってます」

素晴らしい。私からすれば、戸田さんの存在は奇跡みただい。

今や、イベントだけでなく、災害等においてもボランティアは欠かせない存在になっていて、それをコーディネートしたりマネジメントする方法も運用され始めるが、それが実際に機能しているかどうかは別問題だ。戸田さんのように、組織の中で自分の持ち味を活かし、必要とされ、目標達成に貢献できることがボランティアの喜びであり、原動力。喜びに含まれながら働いている人には、他者へ良い影響を与える力があるものだ。

「上田光太郎と言います。僕もレジスタで働いています。土曜日には1年前くらいから関わってまして、ボランティアさんたちいろいろな企画を考えています。で、僕も実は以前からまちづくりに関心がありまして...」

「え？ なんでなんですか。またしても思わず聞いてしまふ。今どきの若者はなぜそんなにまちづくりに関心があるのか？」

「勉強するほど別に興味ないなあって」

「上田光太郎と言います。僕もレジスタで働いています。土曜日には1年前くらいから関わってまして、ボランティアさんたちいろいろな企画を考えています。で、僕も実は以前からまちづくりに関心がありまして...」

「健康・福祉 介護など高齢者を支える機関「港区東部いきいき支援センター」さんが11月の土曜日に初出店。本紙前号で、地域に暮らす人から聞いた「10年以上前はスーパーに健康相談会が来てくれた」という話からヒントを得て、突然の出店依頼にも快諾いただき実現しました。黒電話や写真などの展示物から昔の経験や思い出を語り合う心理療法「回想法」と、手作り子どもたちや、興味を持ってくださった方との交流が生まれていました。」

「大学2年の時に、ちょうどコロナになって、何にもやる事がなくなってしまうって...。大学は勉強すればするほど、別に興味ないなあって思ってた(笑)」

この件は非常に面白いのだが、紙面の都合上、簡略的に説明させていただきます。上田君は、大学に入学する頃から、自分探しの夢中な青年だっただい。名古屋のスタートアップで働く姉の紹介で、起業家や世界一周した旅人とか、いろんな人々を訪ねて回ったというから驚きだ。大学2年の時、コロナがきっかけで売上が下がってしまった祖母の和菓子屋を救うべく独学でネットショップを立ち上げた際に、そのお店があった豊田市旭町という地域に出会う。それが、彼が地域とかまちづくりに関心を持つ直接のきっかけになったのだという。

「地域って都会か田舎かは関係なくて、全然単純ではないんですけどね。複雑でかつ有機的に人が絡み合っている。この複雑な仕組み自体めっちゃおもしろいな、みたいな目線(まちづくりって面白そうだなみたい)に思ってた...」。

難しい方、わけのわからない方に惹かれる若者(バカ者 感覚に敬意を表したい)。

「そしたら、大学4年の時に、地域のキーマンが古民家を買って何かに使いたいって言い出して、最初、シェアハウスだったんですけど、僕がそこに住まわせてくれと言ったら、じゃあどうせならゲストハウスもやろうぜってなりノリと勢いでゲストハウスとシェアハウスをどっちも併設した施設を作り、じゃあ光太郎君、後は任せたら...」

「おお！」

「なので、僕は今、古民家ゲストハウス兼シェアハウスをやってるんですけど、我流なんで、まちづくりを働きのながら学べればと考えて関わらせてもらっています」

「いやー面白い人たちが集まったもんだ。『光太郎君は、土曜日はどうですか？』「すごく面白いなって思ってます。レジスタがやっているマーケットは非日常的でアンティークマーケットとか、大規模な感じなんですけど、土曜日は日常の延長線上というか、地域の中にあるマーケットっていう対比が面白いなって。その居心地の良さが気に入ってますって居続けているみたいなのが、いいのも、すごく素敵だなって思ってます。一方で、もうちょいアクセント...良い言い方ではないですが『飽きちゃう』っていうのはすごいありますね。めちゃくちゃ無責任ですけど。すみません。その通り。他のメンバー同様、愛着を持ってくれているが、それがどう広げられるのか、世間浸透していくのかには課題があるのが土曜市の現状である。」

「大学2年の時に、ちょうどコロナになって、何にもやる事がなくなってしまうって...。大学は勉強すればするほど、別に興味ないなあって思ってた(笑)」

この件は非常に面白いのだが、紙面の都合上、簡略的に説明させていただきます。上田君は、大学に入学する頃から、自分探しの夢中な青年だっただい。名古屋のスタートアップで働く姉の紹介で、起業家や世界一周した旅人とか、いろんな人々を訪ねて回ったというから驚きだ。大学2年の時、コロナがきっかけで売上が下がってしまった祖母の和菓子屋を救うべく独学でネットショップを立ち上げた際に、そのお店があった豊田市旭町という地域に出会う。それが、彼が地域とかまちづくりに関心を持つ直接のきっかけになったのだという。

「地域って都会か田舎かは関係なくて、全然単純ではないんですけどね。複雑でかつ有機的に人が絡み合っている。この複雑な仕組み自体めっちゃおもしろいな、みたいな目線(まちづくりって面白そうだなみたい)に思ってた...」。

難しい方、わけのわからない方に惹かれる若者(バカ者 感覚に敬意を表したい)。

「そしたら、大学4年の時に、地域のキーマンが古民家を買って何かに使いたいって言い出して、最初、シェアハウスだったんですけど、僕がそこに住まわせてくれと言ったら、じゃあどうせならゲストハウスもやろうぜってなりノリと勢いでゲストハウスとシェアハウスをどっちも併設した施設を作り、じゃあ光太郎君、後は任せたら...」

「おお！」

さて、まち協スタッフたちはどうだろう？

土曜市の担当はピニさん。たが、4年間も毎月ずっと続けられているのがすごいですね。結果的に、それがようやくよく浸透してきたという実感が僕らにもあっている。街の人から『こういうことしてみたい』って声もちょとずつ増えています。今度は、それに他の魅力的なイベントを結びつけたいんですが、毎回ドタバタになってしまつて、年間のスケジュール調整ができません。

「まず、規模は、大きくなりすぎないでほしい。4年間も毎月ずっと続けられているのがすごい。結果的に、それがようやくよく浸透してきたという実感が僕らにもあっている。街の人から『こういうことしてみたい』って声もちょとずつ増えています。今度は、それに他の魅力的なイベントを結びつけたいんですが、毎回ドタバタになってしまつて、年間のスケジュール調整ができません。」

「4年間続けてきたプロジェクトだからこそ、年間計画は当然存在している。しかし、そこにコロナがあり、コロナ後の復帰への助走があり、委託制度の変更、組織やスタッフの入れ替わりといった現実的な問題が絡むと、計画というのはあくまで予定でしかなくなってしまう。そして、行政が絡む決裁システムが緩むことはない。そこには、ほとんど可視化不可能な無数の調整が生まれていく。」

「今の土曜日には、ワークショップがあつて、子どもや親御さんの顔が見えてきているし、常連の出店者さんもそうですが、馴染みの顔が増えています。でも、土曜日が日常の延長線を目指すのだとしたら、毎回大勢の人が来てしまうのは不自然だとも思うんですよ。もちろんマーケットなので、集客は前提なんですけど...」

土曜日は、気持ちのこもった商品やコミュニケーションの交換を通して、出店者はもちろん、街の人や関わるボランティアさんといった人々の挑戦をお互いに応援し合えるようなマーケットを目指してきた。そして、それを実現させる企画や戦略が練られる中で、まずはその想いに共感してもらえらる出店者やボランティアを集めながら、『まちづくりを大切にしたい』と云える。ピニさんの話を聞く限り、その試みはある程度の成果が得られているようだ。しかし、それを経済的にも自走できるようなプロジェクトにしていけるためには、何かが必要だ。私は躊躇しつつも、疑問を投げかけてみた。

「土曜日は、今後のまち協にとって大事な事業です。しかし、それと並走してくれている事業者さんにとつては、そろそろ経営的な見極めも必要かもしれません。つまり現状の土曜日には大きな課題がある。継続してきたことに価値はあるけど、これからもそれだけを目指すことはできない。あえて言えば、補助金がなくなったから終わりなら、事業的には魅力も将来性もないというか...そんな気がするんですが、どうでしょう？」

即座に口を開いたのはあやちゃん。「たぶんこの事業に関わっている人全員がフワッとしている状態かもしれない。例えばターゲットの人を改めて決めようという話になった時も、若干迷っちゃった」

それを拾ったのは岡西さん。「そうね。迷っているって言うよりは、基本的にまちづくりって言われた瞬間に(ターゲットが)全方位になる。土曜日に求められているのは若い人たちが集まることだと思っんですけど、若い人たちの多くは地域の外にいるんで、やっぱり外から人を呼び込める何かが必要。だから、若い人向けのイベントをやる。だけど、それだけだと地域の年齢層の高い人たちからは私たちに欲しいものはない!」って声も聞こえてくる。なので、そのバランスをとるようになっているけど、そのハードリングは、岡西次第みたいになっているのが現状ですね。たぶんそこが、みんなからすると見えにくい難しいんだね」

フワッと理由が見えてきた。

「定期市だから、毎月あって、年間に1〜2回とかじゃないんで、力の入れ方が難しいという分散しちゃうから、頑張つてこれに向けてやるぞっ

「4年間続けてきたプロジェクトだからこそ、年間計画は当然存在している。しかし、そこにコロナがあり、コロナ後の復帰への助走があり、委託制度の変更、組織やスタッフの入れ替わりといった現実的な問題が絡むと、計画というのはあくまで予定でしかなくなってしまう。そして、行政が絡む決裁システムが緩むことはない。そこには、ほとんど可視化不可能な無数の調整が生まれていく。」

「今の土曜日には、ワークショップがあつて、子どもや親御さんの顔が見えてきているし、常連の出店者さんもそうですが、馴染みの顔が増えています。でも、土曜日が日常の延長線を目指すのだとしたら、毎回大勢の人が来てしまうのは不自然だとも思うんですよ。もちろんマーケットなので、集客は前提なんですけど...」

土曜日は、気持ちのこもった商品やコミュニケーションの交換を通して、出店者はもちろん、街の人や関わるボランティアさんといった人々の挑戦をお互いに応援し合えるようなマーケットを目指してきた。そして、それを実現させる企画や戦略が練られる中で、まずはその想いに共感してもらえらる出店者やボランティアを集めながら、『まちづくりを大切にしたい』と云える。ピニさんの話を聞く限り、その試みはある程度の成果が得られているようだ。しかし、それを経済的にも自走できるようなプロジェクトにしていけるためには、何かが必要だ。私は躊躇しつつも、疑問を投げかけてみた。

「土曜日は、今後のまち協にとって大事な事業です。しかし、それと並走してくれている事業者さんにとつては、そろそろ経営的な見極めも必要かもしれません。つまり現状の土曜日には大きな課題がある。継続してきたことに価値はあるけど、これからもそれだけを目指すことはできない。あえて言えば、補助金がなくなったから終わりなら、事業的には魅力も将来性もないというか...そんな気がするんですが、どうでしょう？」

即座に口を開いたのはあやちゃん。「たぶんこの事業に関わっている人全員がフワッとしている状態かもしれない。例えばターゲットの人を改めて決めようという話になった時も、若干迷っちゃった」

それを拾ったのは岡西さん。「そうね。迷っているって言うよりは、基本的に基本的にまちづくりって言われた瞬間に(ターゲットが)全方位になる。土曜日に求められているのは若い人たちが集まることだと思っんですけど、若い人たちの多くは地域の外にいるんで、やっぱり外から人を呼び込める何かが必要。だから、若い人向けのイベントをやる。だけど、それだけだと地域の年齢層の高い人たちからは私たちに欲しいものはない!」って声も聞こえてくる。なので、そのバランスをとるようになっているけど、そのハードリングは、岡西次第みたいになっているのが現状ですね。たぶんそこが、みんなからすると見えにくい難しいんだね」

フワッと理由が見えてきた。

「定期市だから、毎月あって、年間に1〜2回とかじゃないんで、力の入れ方が難しいという分散しちゃうから、頑張つてこれに向けてやるぞっ

「土曜市の魅力はやっぱりカオスですかね。特に今日のプロレスとかはカオスの塊だと思えます。他にはないですよ」

「ポットラックバザールは、さらにカオス感すごいですよ」

「そういうカオスを受けて入れてくれる雰囲気、この街にはあるから」

「確かに友達とか知り合いに土曜日遊びに来てよって声をかけたたりするんですけど、その時にそういうちょっと変わったイベントがあるといいなと思えます」

土曜日メンバーは、港まちならでは突拍子もないイベントコラボを面白がっているようだ。

ピニさんが続ける。「ボランティアさんで集まっている人たちも、カオスっていうかカルチャーな感じが集まっているなあと。DJ、絵描き、ランニング...あ、つまり個人的な人たちというか(笑)。そういう人たちが楽しそうにしているのを見ると、そこを



写真：倉田果奈

Column

#もつとみなと土曜市のこと3 目指すは 日常／非日常のマーケット

本文によく出てくる「日常／非日常」という言葉。みなと土曜市のコンセプトは「まちで楽しむ、まちを楽しむ、さまざまなチャレンジが生まれるマーケット」。ここには、日々の暮らしをちょっと豊かにする毎月のお楽しみとしてのマーケットを目指してきた経緯があります。地域商業の衰退や、「コロナ禍によるコミュニケーションの純化など、人との接点を持ちにくくなった時代の交流の場所としてありたい」と、はじめての出店に不安な人があと一歩踏み出せるような場所でありたいという、日常の延長線上にあるマーケットとしての思いがあります。まち協スタッフと土曜日メンバーで、どんな土曜市を目指しているのかを共有しあう中で生まれたキーワードのひとつです。

その何が起きるかわかんないこと...: 要は誰を呼んで、どう混ざるかみたいなことまでは、こちらでは企画できない。だから、今言ってもらったようにボランティアを含めた関わるメンバーを増やして、その人たちがこの人面白いよ」とか、「この人こんなことやりたいな」とか、この人この人この人が作れると良いかもしれないですね」

本物のカオスはコーディネートできない。しかし、状況を受け入れながらルールを整備したり、企画と共存させながら、全体の枠組みを整理するプラットフォームはつくられるかもしれない。だいぶ整理がされてきた。

さて、どうするか。時計は18時に差し掛かっていた。ようやく本格的な議論になってきたが、18時半を意識すると、一旦まどめに入らねばならない。

結局ミーティングの終了時刻は18時40分。最後にもった二人ずつのコメントには、自省があり、学びがあり、いくつかの希望も語られていた。しかし、このミーティングだけで何が解決したわけではない。ここにまどめたいくつかの兆しのようなものをどう活用するかは、今後の実践に委ねられている。前号の記事でもこの前段となるミーティングをレポートしているので、ぜひこれと合わせて読んでほしい。より理解が深まると思います。

カオスに目を凝らすと

「土曜市の魅力はやっぱりカオスですかね。特に今日のプロレスとかはカオスの塊だと思えます。他にはないですよ」

「ポットラックバザールは、さらにカオス感すごいですよ」

「そういうカオスを受けて入れてくれる雰囲気、この街にはあるから」

「確かに友達とか知り合いに土曜日遊びに来てよって声をかけたたりするんですけど、その時にそういうちょっと変わったイベントがあるといいなと思えます」

土曜日メンバーは、港まちならでは突拍子もないイベントコラボを面白がっているようだ。

ピニさんが続ける。「ボランティアさんで集まっている人たちも、カオスっていうかカルチャーな感じが集まっているなあと。DJ、絵描き、ランニング...あ、つまり個人的な人たちというか(笑)。そういう人たちが楽しそうにしているのを見ると、そこを

カオスに目を凝らすと

「土曜市の魅力はやっぱりカオスですかね。特に今日のプロレスとかはカオスの塊だと思えます。他にはないですよ」

「ポットラックバザールは、さらにカオス感すごいですよ」

「そういうカオスを受けて入れてくれる雰囲気、この街にはあるから」

「確かに友達とか知り合いに土曜日遊びに来てよって声をかけたたりするんですけど、その時にそういうちょっと変わったイベントがあるといいなと思えます」

土曜日メンバーは、港まちならでは突拍子もないイベントコラボを面白がっているようだ。

ピニさんが続ける。「ボランティアさんで集まっている人たちも、カオスっていうかカルチャーな感じが集まっているなあと。DJ、絵描き、ランニング...あ、つまり個人的な人たちというか(笑)。そういう人たちが楽しそうにしているのを見ると、そこを

カオスに目を凝らすと

「土曜市の魅力はやっぱりカオスですかね。特に今日のプロレスとかはカオスの塊だと思えます。他にはないですよ」

「ポットラックバザールは、さらにカオス感すごいですよ」

「そういうカオスを受けて入れてくれる雰囲気、この街にはあるから」

「確かに友達とか知り合いに土曜日遊びに来てよって声をかけたたりするんですけど、その時にそういうちょっと変わったイベントがあるといいなと思えます」

土曜日メンバーは、港まちならでは突拍子もないイベントコラボを面白がっているようだ。

ピニさんが続ける。「ボランティアさんで集まっている人たちも、カオスっていうかカルチャーな感じが集まっているなあと。DJ、絵描き、ランニング...あ、つまり個人的な人たちというか(笑)。そういう人たちが楽しそうにしているのを見ると、そこを